

# 論 説

「打ちましたか」「2回目はこれからで」。そんな会話が高齢者のあいさつ代わりになった。

新型コロナウイルスのワクチン接種はようやく軌道に乗りつつあるが、いまだに理解しがたいのは、接種の優先順位だ。

国の手引き書は、①医療従事者等②高齢者③基礎疾患を有する者④高齢施設等



## 宮武 剛

### 新型コロナ・ワクチン

# 福祉職への接種を急げ

の従事者⑤60〜64歳⑥これら以外、の順である。

医療職の優先は当然だが、在宅介護や保育も含めた「福祉職」はなぜ医療職と同等の扱いにされないのか。高齢者の介護も、障害者の支援も、保育も、施設と在宅を問わず感染リスク

護等の福祉施設も1600人(27%)に上る。福祉新聞のまとめで感染発生福祉施設は6600力所を超えた。内訳は高齢者施設、保育所・こども園、障害者施設の順(5月末)。

認知症、行動障害、幼児らと向かい合う現場では相

に踏み切る例が相次ぐ。政府・厚生労働省は、現場最優先の接種順位を率先して勧めるべきだ。何のために医療・介護・福祉の連携を図る「地域包括ケア」体制を提唱してきたのか。

ワクチンの接種方法にも疑問点はあ

障害者らにも訪問診療の形で接種を図れる。同県の診療所は人口1万人当たり全国1位(11力所)だが、むしろ医師会の意欲や自治体との連携の賜物だろう。

保健所についても、効率化で全国的に半減される中、和歌山県(94万人)は8力所、支所1力所を維持した。コロナ禍に際し知事の指揮で保健所は一体になって検査・早期発見・隔離

の最前線である。

現に昨20年の労働災害発生状況で新型コロナウイルス罹患の死傷災害は病院等の医療保健業が最多の2961人(全体の49%)、次いで介

手にマスク必着を求めるとさえ難しく、触れ合わなければ仕事は成り立たない。不安を抑える使命感と懸命の努力で辛うじて利用者を守ってきた。

特に高齢者には、かかりつけ医を主軸の個別接種をもっと強力に進めるべきだ。国民皆保険を支えてきたのは各地の診療所(かかりつけ医)である。全国で最も早く2回目の接種が進む和歌山県では、まさにかかりつけ医が推進役になっている。在宅の要介護者、

い。 (本紙論説委員)

みやたけ・ごう NPO法人福祉フォーラム・ジャパン副会長、学校法人・社会医学技術学院理事長

の従事者や保育士らの接種

い。

い。